
潰れたい

よしなが あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
潰れたい

【Nコード】
N4312A

【作者名】
よしなが あこ

【あらすじ】
偶然見てしまった事故、聞いてしまった声。始まりはすべてそこからだった。そして破裂音・・・広がっていく暖かな恐怖。俺のまわりが、潰れていく。

声の連鎖

毎日同じ単純な労働、毎度同じ面々がぞろぞろと群れをなし、同じような薄汚れた顔で一日の始まりから終わりまでを繰り返す続ける。永遠に続くかと思うようなやるせなさ、こんなはずではと焦燥感に蝕まれる胸中。だが同時に、そこから抜け出すことはできないということ、覚^{おぼ}はようやく気づき始めていた。

……

中学校ではそこそいい成績だったから、ちょっとだけ受験勉強を頑張って、それなりにいい高校へ入ることができた。

昔からそうだ、俺は別にそれほど努力しなくても、適当に何とか世間の中を泳ぐことができたから、高校に入ってからきつと、同じように「どうにかなる」と思っていたんだ。

新しい友達。新しい彼女。新しい遊び場。

勉強そっちのけで俺は、学生生活を謳歌した……

親の金も、他人の持ち物も、まるですべて自分の所有物。友達と一緒になら何も怖くなかったし、そうやって徒党を組んでやることの楽しさと言ったら、比べる物がないほどだった……それがどんなに、悪いことでも。

そうやっていううちに、俺たちは踏み越えてはならない境界線を、その楽しい気分のままで簡単に突き破ってしまった。

傷害罪で逮捕。高校は退学。

そして勘当。

俺の「どうにかなる」はずだった人生は、軽はずみな悪ふざけが積み重なって、見事に崩れてしまった。

見てみる、今のこの俺の姿。

土ぼこりにまみれて、べたつく汗を汚いタオルで拭う日雇い労働の毎日……前科者で未成年の俺が働ける場所といえばこんなところしかないし、選り好みできるはずもない。働いて稼がないと、生きていけないんだから。

くたくたの身体を休める部屋は狭いワンルームで、風呂はあってもシャワーはない。俺の女がいつもそれでブツブツ文句を言っている。壁が薄いから風呂の独り言なんてみんな筒抜けだ。

親はすでに俺の知らない土地へ越したらしく音信不通。いくら息子が悪党だからって、そこまで完璧に見捨てられるもんなのか。

当然毎日飲んだくれるから金もありゃしない。

……何て人生だよ、まったく。

「おい覚、仕事上がったら、どこに飲みに行く？」

覚はハッとして白昼夢から我に返る。声をかけてきたのは、覚と共に徒党を組んで悪さをした仲の忠明ただあきだった。

ちよつと考えて、覚は首を振った。

「いや……今日はいい。まっすぐ部屋へ帰るよ。」

「何だよ、女でも来るのかよ。」

「違う。……飲む気分じゃねえんだよ。この前のアレがあってから……」

覚の口調が重くなったのを見て、忠明もああ、とうなずいた。

「……俺はそんな時、別の現場だったからその「場面」は見てねえけど……ひどかったんだったな。」

「……ああ。ひどかったよ。」

数日前。

新しい道路を作るための工事をしていた覚たち。たくさんの工事車輛が行ったり来たりする中、車の流れがゆっくりとその脇を通り

過ぎていく。交通整理の警備員が赤い旗を振り、車の列に止まれと合図した、その時。

道路を平らに均すロードローラーの横に止まった車のドアが突然開き、そこから一人の若い女が飛び出してきた。女は般若の形相でロードローラーへ頭から突進し、迫り来る恐るべき重量のローラーに、

……押し潰されたのだ。

運転手がローラーを停止させたが、間に合わなかった。

めきめきと碎けていく骨の音。

悲鳴とも狂気ともつかぬ、女の金切り声。

そして、頭蓋が割れる、言いようのない……嫌な音。

覚はその一部始終を、それほど離れていない距離で見つめていたのだ。目を逸らそうにも、まるで何かに囚われたかのように、瞬きすらもできなかった。

真新しい道路に一気に広がる、黒い血だまり……その血の流れが自分に向かって流れてくるのに気付いたとき、覚の身体を初めて恐怖が突き抜けた。

「わあああああ!!」

そこから先は、よく覚えていない。警察の事情聴取や、職場の調書にも、何を書いたのか、覚は定かではない。その日家にどうやって帰ったのかすら、覚はよく覚えていなかった。

だがあの時の凄惨な状況が、まだ覚の脳裏にくつきりと刻まれて薄れない。

ゆつくりとローラーに巻き込まれていく、あの女の形相……くぐもった、鈍い破裂音。

飛び散る……赤黒い血と、灰色の……脳味噌……

「分かったよ、その話をされると俺も飲む気が失せちゃう。」

忠明の言葉で、またも白昼夢から引っぱり戻される覚。あのゾツとする情景を必死に心から追い払いながら、覚はうなずいた。

「悪いな。」

「いや……そういえば、その時飛び出してきた女の乗ってた車、この前事故でぺちゃんこになったってな。」

「え……」

「過積載のトラックの積荷が崩れて、その車をドライバーごと押し潰したらしいぜ。ナンバーが同じだから間違いないって、この前井関さんから聞いたぜ。」

「井関さんって……」

「あの時ローラーを運転してた人だよ。この道20年のベテランなのに、あんな事故になっちゃって、最近ずいぶん塞いでるみてえだな。」

覚は、黙り込んだ。

「あの女、別れ話のもつれで自殺したってことになったけど……男もてめえの女と同じ死に方するなんてなあ……これが呪いってやつなのかな、怖え怖え。」

忠明はぶつぶつそう言いながら、持ち場へ戻っていった。

覚は、思い出してしまった記憶の残像を必死に振り払おうと、がむしゃらに働き始めた。……思い出す前に寝てしまおう、そう思いながら。

そうやって終えた仕事の後、コンビニで発泡酒を二本と弁当を買い、覚は足を引き摺りながらアパートへの道を辿り始めた。

携帯が鳴った。

ポケットから取り出して着信ランプを眺める覚は、億劫そうな顔でため息をついた。今付き合っている女……女子高生の奈緒からだった。

通話ボタンを押して耳へ持っていくと、早口の金切り声が飛び出してきた。

『ちょっと覚、仕事終わったんでしょ？帰ってくるの遅いじゃん！』
「うるせえな、コンビニ寄ってたんだよ。」

『あたし授業終わってからずっと家で待ってんだよ、寄り道なんかしてないでさっさと帰ってきてよ。』

「……待ってろなんて頼んでねえよ。勝手に人の部屋上がり込んでいてゴーマン口調はやめろっての。」

覚はおもむろに携帯の電源を切った。奈緒はまだ何か喚いていたようだが、覚にはどうでもよかった。友達の付き合いで仕方なくナンプしたのが奈緒で、それからずるずると適当な体の関係が続いているが、愛を感じたことなど一度もない。奈緒が部屋へ来て素っ裸になっているときは、覚に遊ぶ金をせびりに来ているだけなのだ。最近では奈緒からメールが来るだけで、げんなりするようになった覚だった。

アパートにつき、部屋のドアを捻ると、そのままドアが軋んで開いた。合鍵を持っている奈緒は、鍵もかけずに覚の部屋で過ごしていたらしい。

「遅いよ覚、待ちくたびれたよお。」

甘ったるい猫なで声。正直、もう聞き飽きている。想像通り、奈緒はもう全裸でベッドに入っている。よほど金が欲しいらしい。

「ひどいじゃん、ヒトが喋ってんのに携帯切らないでよね。」

覚は何も言わずに冷蔵庫を開け、発泡酒を二本ドアポケットへ入れる。その日の重苦しい気分が、覚の口を余計に重くしていた。奈緒は自分でセクシーと思い込んでいるポーズを決めて、覚に呼びかけた。

「ちょっと可愛い子がこうして待ってんだからさ……これ以上待たせないでよ。」

覚は、振り向くのも億劫だった。俺の気持ちなんて誰も分かりやしねえ。

「……今日はそんな気分じゃねえ。帰れ。」

「ちょっと……何よその言い方。」

「帰れって言ったんだよ、聞こえねえのかよ。おまえにやるような金はねえ、さっさと出てけ。」

「嘘、一昨日給料日だったでしょ、金ないわけないじゃん！」

「金がほしくて体売るなら、他の馬鹿な野郎でも引っ掛けな。俺はもうたくさんだ……二度と来るな。」

「本気で言ってるの！？いいよ、そこまで言うんなら出てってやるよ！」

奈緒は布団を蹴飛ばし、裸のまま俺の前を横切って下着を着け始めた。ぎりぎりまで短いスカート、わざと開けた胸元。覚はもうそんな姿を見るのもうんざりだった。そうやって身支度を整える間中ずっと、覚に恨み言をぶつぶつと言いつける奈緒……余程プライドが傷ついたらしい。

テーブルに合鍵を叩きつけた奈緒は、靴を履きながらも一度覚へ振り返った。

「……あたしが街歩けば、声かけてくる男なんていっぱいいるんだからね。後悔しても知らないよ。」

「パンツ見せて歩いてる馬鹿な女子高生は、簡単に誰とでも寝るカモだって知ってたよ、バーカ。」

奈緒は顔を引きつらせ、思い切り強くドアを閉め、出て行った。

覚はそのドアをしばらく見つめていたが、軽いため息をついて視線を逸らした。これで金食い虫とオサラバできたか……

覚は携帯のアドレスを開き、奈緒からの着信を拒否するよう設定した。わずらわしい恨み言メールがしばらく続くような予感がしたのだ。

無気力な身体を布団に投げ出し、天井を見上げる。

つまんねえ人生。

誰だよ、こんな世界を俺に押し付けたのはよ。

しばらくそうしてぼうつとしていると、耳鳴りがした。

キュン、と耳が痛くなる。

『きいやああひひひひひひひひひひぎゃひ』

あの声だ

あの女の

あの声だ

潰れた女

あの悲鳴

あの声だ

空耳だ！

覚は必死に耳を塞いだ。

しかし耳とは別の感覚が、その続きのいやな音を聞いた。

……破裂音。

「ひっ……！」

思わず漏れる声。覚は跳ねるように飛び起きた。

汗をびっしょりかいている……俺はいつのまにか寝てたのか。

夢なんだ、そうだろ……ああ、嫌な夢だ……

ずるずると身体を引き摺り、冷蔵庫へと向かう。冷たい発泡酒でも飲めば、気分が少しはすっきりするだろう。

冷蔵庫のドアへ手をかけた瞬間。

携帯が鳴った。

びくりと体が跳ねる。夢のせいで神経質になってんだ、馬鹿な俺……

覚は布団へ戻り、携帯を見る。着信は奈緒だ。

恨み言でも言いにくたのかよ、全く懲りない奴……

そこで覚はハッとした。

さっき……

奈緒からの電話は着信拒否にしたはず……

覚は思わず、携帯の通話ボタンを押した。

その瞬間、心のどこかで「しまった」と思いながら……

「……奈緒？」

恐る恐る、呼びかける覚。何かが……違う……

『……覚……』

奈緒の、珍しくしおらしい声が、携帯の向こうから聞こえた。
少しホッとして、肩から力が抜ける覚。

『あたしね……』

覚は黙っていた。ヨリでも戻そうというのだろうか。

『つ　ぶ　れ　ち　ゃ　っ　た　　んだぎやわぎえあああああ
ああ』

どくん。

「わあああああっ!!」

覚は携帯の電源を切り、そのまま部屋の向こうへ投げつけた。壁に叩きつけられた携帯が、ぼとりと棚の上に落ちる。

奈緒の奴、手の込んだいたずらしやがって!! 今度会ったらぶん殴ってやる!

そう思いながらも、覚は腹の底から湧き上がる冷たい恐怖に慄かずにはいられなかった。

あの声……あのときの声にそっく……

携帯が鳴った。

覚の顔から血の気が引く……

さつき俺……電源は切って……

「ひいっ!!」

覚は女のような甲高い悲鳴をあげ、転げるように部屋から飛び出した。アパートの階段を、踏み外しそうになりながら駆け下りると、一目散にネオン輝く街の中へと走っていった。光のある、騒々しいあの場所なら、あんな声に負けるはずがない……そう信じたかった。

そうやって走るうち、ふと足が止まった。

交差点に、人だかりができている。何事だろうと足を向けかけた時、周りの野次馬の声が覚の耳に届いた。

「ぼんやり運転のタンクローリーに？」

「巻き込まれたんだって。」

「女子高生でしょ……高市女子の制服だったよ。」

「女の子は携帯に気を取られて？」

「すごい悲鳴がしてさあ……」

「今日寝れないよ、あんなの見たら。」

悟は息を飲んだ。高市女子高の制服……

奈緒の高校と、同じ。

警察の車輛の赤色灯が目障りなほど輝いている……覚はその人垣の向こうを覗くことはできなかった。というよりも、覗かなくてもそこに何かあるのか分かってしまった。

そして野次馬の中の一人が、つぶやいた。

「携帯も一緒に潰れて、肉の中だっさ……」

どくん。

覚は再び、何かに取り付かれたように走りだしていた。

圧力の誘惑

どこをどう走ったのか、覚は職場の入り口にやってきていた。

喉が渴いて、息がひゅうひゅうと細く鳴っている。こんなに長く走り続けたのは久しぶりだった。高校の時に悪さをして警官に追われた時以来か……

そんなことを考えながら、覚は顔中に流れる汗を乱暴に拭った。

すでに事務所の電気は消えて、入り口にある大きな自動販売機の明かりが目にもぶしい。

冷たいものでも飲もう……喉が渴いて眼が回りそうだ。

小銭を財布から取り出し、コーラのボタンを押す。
がたん。

取り出し口へ手を伸ばすと、冷たいコーラの感触が指先に心地よかった。

自動販売機の隣に座ると、覚はコーラの栓を開けてグイとおおった。喉を鳴らし、炭酸の爽快感に浸ってしばし、無心になる……

「ふう……」

かたん。

何か音がした。

ハッとして顔を上げると、男が立っていた。
その顔には、見覚えがあった……

「よう……どうした、こんな時間に……」

井関だった。

あの、女が飛び込んだローラーを運転していた……
覚は心なしかほっとして、無理やり笑ってみせた。

「あ、はあ……忘れ物取りに来たんですけど、事務所閉まって……」

適当な嘘をついてその場をやり過ごすのは、いつもの覚の癖だった。いちいち説明するのは馬鹿らしかったし、何よりも覚自身がそれを……信じたくなかったせいでもある。

井関は覚から少し離れた場所に座り、遠くのビルの明かりを見つめてぼつりと言った。

「覚……俺は、もうだめかもしれん。」

「え？」

「あの女が飛び込んできた瞬間、眼が合っちゃったんだよ……焼きついて離れねえんだ、悲鳴や音まで頭の中をぐるぐる回りやがる。」
「……」

お、俺もなんです……！

覚は心の中で搾り出すように叫んでいた。だが……声に出せなかった。

「俺のまわりがみんな……潰れていくんだ。」

井関は頭を抱えた。

みんな、潰れていく……

「次は……俺の番なんだ……あの女、自分で潰れて死んだくせに、何で俺に逆恨みしやがるんだ！」

「逆恨み……」

「そうだ……でなきゃ、こんな気分になるわけがねえ。」

覚の汗ばんだ顔に少しだけ振り返った井関は、右足の靴を脱いで見せた。薄汚れた白い靴下に、べつとりと血が滲んでいた。

かなりの……怪我だった。

覚は目を見張る……口を開きかけると、井関はがくりとうなだれてつぶやいた。

「……今日の現場で、機械の間に挟んじまった。」

「て、手当してないんですか!？」

「……」

井関は、押し黙った。覚の問いかけに答えあぐねているのが、その目つきの落ち着きのなさで分かった。

しかしゆっくりと、井関は顔を両手で覆う。

「……『事故』じゃねえ……俺は、わざとやったんだ……俺は……」

覚は、自分の耳をふさぎかけた。しかし何かをそれを止める。

「……俺は自分が、『潰れたがってる』って気付いちまったんだ……!」

覚の顔から、一気に血の気が引いた。

「覚……俺はもう……だめなんだ……」

その時だった。

事務所の奥にある工事車輛の倉庫から、突然エンジン音が響いた。ハツとして振り返った覚と井関は、そこから大きなブルドーザーがバックしてくるのを見た……

こんな夜に誰が？

だが答えはすぐに絶望を叩きつける。

。 運転席には誰も乗っていないのだ

「いつ、井関さん逃げよう、早く!!」

覚は慌てて井関の腕を引っ張った。

しかし井関は、そんな覚を一瞥すると、その手をそっと振り払った。何も言わず、バックしてくるブルドーザーの赤いライトに、吸い寄せられていくかのように歩き出す。

覚は声が出なかった……井関が言っていた言葉が、その絶望に拍車をかける。

俺は潰れたがっている

「だめだ井関さん、井関さんっ!!」

覚の声が騒々しいブルドーザーの音にかき消される。それでも少しは井関の耳に届いたのか、井関は間際にすっと悟へ振り返る。

覚は凍りついた。

井関は満面の笑みを浮かべて、こう言った。

「つぎはおまえだあ。」

ブルドーザーのキャタピラが、井関の足をつかんだ。

引き倒されて地面に叩きつけられる井関は、それでも笑っていた。まるで至福の喜びに歓喜しているような……

井関の上を、遠慮なくブルドーザーがバックしていく。

その轟音に紛れて、骨が砕けていく音が聞こえる。

覚は涙を流し、全身をがくがくと震わせてその恐るべき情景を見せ付けられていた。逃げ出そうにも、足が動かない。叫ぼうにも、声が出ない。

潰れていく

砕けていく

笑っている

轢かれていく

そうして胸までキャタピラに押しつぶされ、口から血泡と内臓器をぐぶぐぶと噴き出しながら、井関は覚を見た。

息が止まる、覚。

耳を押さえなきゃ、早く……早く！

やめてくれ！！

「ぎへへへええぐひゃあぶぎえええおおおがべ」

一気にブルドーザーが加速した。
ばくん。

声の終わりと同時に、飛び散った灰色の……

脳髓。

「やつ……やめ……助けて……助けてくれよおお！！」

覚は叫びとともに崩折れて、頭を抱えた。

つぎはおまえだ

そんな……そんなことがあったたまるか、俺は死にたくない！
死ぬもんか、潰れて死ぬなんてまっぴらごめんだ！！

井関と、井関を轢き敷いたままピタリととまったブルドーザー。
覚は必死にその脇をすり抜け、再び夜の街へと駆け出していった。
あの街の中なら、潰れて死ぬなんてありえない。

あの明るい光の下でなら、潰れたいだなんて思うはずがない！

走る。

ただひたすら、明るい街の方向を目指して。

だが……

「あれ……」

どうしても、街の中へ行く事ができない。

光を目指して走っているはずが、いつの間にか細く暗い小路に入ってしまうのだ。覚は見慣れた街の中を必死に走った。この先を曲がれば大通りに出るはずだ……からまりそうになる足を蹴って角を曲がる。

「！……」

また、細い小路だ。ここにこんな細い道があるはずがないのに！
覚は脱兎のごとく駆け出す。止まったら殺される、死にたくない
！！

走る、走る……

「そんな……馬鹿な……！」

どうしても、大通りに出る事ができない……家々の隙間から、明るいネオンや行きかう車が見えているというのに、覚はそこへ行き着くことができないのだ。

どれくらい走り続けただろう。全身が重くなり、もう走ることもできなくなつて、覚はもうだらだらと足を引き摺って歩くしかなか

った。どす黒くなった顔で、まるで亡者のように……

暗い道の先、歩道脇に何かの塊が転がっている。

「……」

大量の血だまり、わずかにのぞく白い肌……しかし原型をとどめぬまでに潰れてしまった、人とは呼べぬ、人の残骸。

奈緒だ……

『覚……次はあんたよ。』

「……うるせえ、死んでろ。」

覚はそう吐き捨て、潰れた奈緒の横を歩いて通り過ぎた。

その先にも、薄い盛り土のような何かがあった。やたらと長く続く黒々とした塊……

キャタピラに轢き敷かれ伸びてしまった井関の残骸だ。

『もうすぐだ……待ってるぜ。』

「……死んでたまるか……！」

覚は脂汗を滴らせ、足を引き摺りながら街を目指す。

俺は……潰れたくなんかない！

囚われの痛覚

足元もろくに見えない暗闇の中、覚は遠くに見える街灯らしき灯りを目指して歩いていた。すでにもう走る気力も、体力もなかった……時間の感覚はもはや失われ、あるのはただ、ガンガンと鳴り続ける頭の中の痛みの核と、胸の中にこみ上げる恐怖だけだった。

覚は灯りの近くにやってきて、ハッと顔を上げる……

灯りは、街灯ではなく建物の灯りだったのだ。覚は恐怖に凝り固まっていた全身が、一気に緩んでいくのを感じる。

建物の側にいれば、絶対に誰か人がやってくるに違いない、俺は一人じゃない……これで潰れずにすむはずだ！ざまあみろ、俺は死なねえぞ！

覚は心の中で勝ち誇ったように叫んだ。

近づいていくと、そこは自動車の整備工場のようなだった。すでに夜遅いせいか、人影も気配もない。この灯りの下にいれば、必ず朝がやってくる。朝がくれば、絶対に俺は勝てる。いちばん明るい入り口の近くに小走りで駆け寄り、壁にもたれかかってようやく、かすれた息で深呼吸する覚。

それにしても……

なぜ、俺がこんな目に合うんだ。

あの女を轢き潰した井関さんが呪われるのは分かるけど、どうして見ていただけの俺まで、巻き添えにならなきゃいけないんだ。おまけに全然関係のない、奈緒まで……

『……この子は私とおんなじ。だから引っ張ったの。』

ギョツとして顔を上げる。灯りの届かないところに、誰かがいる

……

……二人。

ごぼごぼという雑音とともに響く、聞いた事もない女の声。

覚は、どっと汗が滲み出るのを感じる。

もうひとりとは……奈緒……

『この人には、私を醜くした罰を与えたの。』

隣に、すっともう一つの影が浮く。

……三人。

醜くした、罰…… い、井関さん……！

『こいつは、私を不幸せにした元凶……こうなって当然なの。』

四人。

不幸せの元凶？ 別れた男……潰れて死んだ……男……

目の前の闇の中に、四人……いる。

『そして、あなた。』

「や、やめろ……何で俺なんだ、何で！！」

覚は掠れた、上ずった声で搾り出すように叫ぶ。四人の足元に、静かに血だまりが広がっていた。じりじりと迫る、暖かな恐怖……あの時と同じ。覚は悲鳴を上げかけたが、声が出てこない。

『あなたは……』

女の声が幾重にも折り重なって頭の中で渦を巻く……

見殺しにした罰……

覚は恐怖で全身が震えだすのを抑えられなかった。見殺し……
覚は、整備工場の裏手へ駆け出していた。

確かにあの時……

目の前に女が飛び出したあの瞬間、声をかけて止めていたら……
振り乱した手を、引っ張り戻していたら……

……間に合ったかもしれない……

見殺し……そんなつもりじゃ……ただ……

『面倒に巻き込まれなくなかった』

心の端に浮かんだ本音を、覚は必死に噛み砕いて飲み込んだ。

たくさんダンボールや機械が並んでいる倉庫の中を、もつれながら縫うように走る。工場の周囲に小さな灯りはあるものの、工場内は真っ暗だ。隅に置かれていた何かの機械につまづいて、覚は勢いよく転んでしまう。倒れこんだ覚が痛みに呻く間もなく、脇に積み上げられていた段ボール箱が、ぐらりと傾いた。

「!」

間に合わなかった。支えようと必死に手を伸ばそうとしたが、倒れこんだ姿勢ではどうすることもできない。大きな段ボール箱が、

容赦なく覚の上に落下する。その衝撃で、床にしたたか腰と頭を打ってしまう。

重い段ボール箱が覚の身体を圧迫する……内臓が重圧に悲鳴を上げる。不様にもがいて段ボール箱を寄せようとするが、疲労困憊している覚には、なかなか持ち上げられない。

だが。

ふと、段ボール箱を持ち上げようとする手が止まる。箱の重みが胸と腹をずっしりと覆う……背中の下にボルトが何本か転がっていて、背骨にぎりぎり食い込んで、覚はしばし、呆然と黙ったままだった。

覚は、そんな自分の感覚に総毛立ち、目を見張った。

嘘だ、そんな……

覚は悲鳴を上げた。

この圧迫感が気持ちいいだなんて

井関の顔が脳裏に蘇る。

『……俺は潰れたがっている……』

このことか。

井関がわざと機械に足を挟んだのは、この感覚のせい……

じりじりと押し潰されていく腹、胸にめり込んでいく段ボール箱の角……

こ　こ　ち　い　い

「ちっ……ちが……いやだあああ!!」

覚は自分の中に生まれた異常な感覚に、絶叫する。嘲笑うかのよう
に自分を押し付けている薄汚れたダンボールを、必死にどかさう
としてもがき、焦る。

そのダンボールの上に。

「ひいっ……」

四人。

乗っている。

潰れた……体が。

滴り落ちてくる血が……ダンボールの壁をだらだらと染めながら

……

……笑っている!

「ぎゃあああ!」

満身の力を込めて段ボール箱を跳ね除けた。ダンボールが倒れる
音に振り向きもせず、工場の裏手へ転がるように駆け込んでいった。
あちこちにぶつかりながら、躓きながら、覚は必死に逃げた。胸
のどこかで浮かぼうとする諦めの言葉を、死に物狂いでかき消しな
がら。

明るくて、身を守る場所……!

覚は混乱した頭の中で必死に「安全」を探そうとする。どこだ、どこだ……！

工場の裏手側が突然開け、数台の自動車が並んでいた。数個の灯りが灯っていて比較的明るく、倒れてきそうな大きな物もない。壁際に潜んでいればきつと逃げられる、覚はすぐさま壁際に止まった車に乗り込んだ。

窮屈な後部座席下に潜り込み、じっと息を潜める……屈みこんだ膝が胸を圧迫して息苦しい。

まただ……

認めたくない、あの感じ。

こ　こ　ち　い　い

さっきほどの強烈な感覚ではないが、その圧迫感覚の痛覚を静かに切り崩していこうとする。馬鹿馬鹿しい、なんで「苦しい」が「気持ちいい」にすりかわるんだ！どうなってんだ俺は！！
けど……

その時。急にどん、と体が沈んだ。

ハッと思う間もなく、猛烈な横揺れが車を襲う。地震！？

考えもしなかった事態に覚はパニックになる。小さいながらも覚を照らしていた小さな光が次々と消えて、辺りは闇に覆われる。恐怖心が限界に達したその瞬間、覚は必死に車から飛び出そうとした。車のドアを開けようとしたまさにその時。重力が覚の身体を突き放す。車が斜めに傾き、凄まじい轟音とともに車ごと、斜面をなだれ落ちていく。車を守るはずだった波トタンの壁は紙のようにひしゃげて、車とともにめりめりと破れ、絶望の悲鳴を上げた。

覚の意識も、絶望とともに立ち消える。

……

ああ……俺死んだのか。

いや違う……でも気持ちいい。病院の中か？

覚は目を見開く。

白々と明けかけた空の端に、自分の置かれた状態が浮き上がっている。

「！！」

奇妙に冴え渡った頭でそれを見た時、愕然とした。

横倒しになった車が、崖下に落下して半分ほど潰れていた。しかもその潰れた車体に、覚の足がちりと挟まれている。ゾツとした……この状態では、足も一緒に……

そして、瀕死の車体に、パラパラと小石が振ってくる。それらはやがて大きな石となって振り始め、覚の頭と同じくらいの岩がごろごろと車にのしかかり始めた。崖が崩れる……覚の脳裏に最悪の予感が走る。その間にもガラスが岩で埋め尽くされ、外の景色を遮断する。めきめきと軋む車体……ガラスにヒビが入り、岩がなだれ込むのも時間の問題だ。

逃げなければ！

しかしもがけない……足が挟まっていて動けないのだ。しかもその状態にいる覚は……

こ　こ　ち　い　い

「違う！死にたくない、死にたくない！！誰か！誰か助けて！！」

バリン。

ガラスが岩の圧力に負けて弾け飛んだ。顔や身体にどろどろと小石や岩がなだれ込んでくる。凄まじい圧力……さらに岩が上に降り注いでいるらしかった。不自然な体勢でその土砂を受けた覚は、足の関節が奇妙にひね曲がるのを感じる。胸も腹も圧迫される……

なのに。

こ　こ　ち　い　い

「ちが……いやだ、こんな……死に方……!!」

骨が軋む。口の中から血泡が吹き上がる。それでも、

『あなたは潰れたいのよ』

「ちが……う……!」

どん、と衝撃が身体に響く。大きな岩が上に落ちたらしい。肋骨がごきりと、あらぬ方向へ曲がるのが分かる。

『気持ちいいでしょ』

「ぐ……あ……」

じりじりと、圧力が増す。鼻や耳が岩に押し潰されていく。

『潰れていくのが気持ちいいだなんて』

すでに覚がいる空間は、空間と呼べるほどの部分がなくなりつつあった。そして自分がもう、人と呼べる姿を半分もしていないのが分かっていながら、覚にはまだ、恐ろしく冴え渡る意識が残っていた。

めきめきとひしゃげていく頭蓋の感触が、分かるほど……

そして覚のいるわずかな空間に、

あの四人が、

ひしめきあっているのが分かるほど。

碎けてひね曲がった顎と押し潰された喉が、覚の絶望の悲鳴を消してしまう。ぐちゃぐちゃに混ざり合った四つの肉の塊が、それぞれ覚にべたべたとまとわりついたまま、金切り声で笑い狂っていた。覚の肉体だけでなく、精神までも粉々にしていく狂喜の笑い声中、覚は残された片目から血の涙を流し、最後の音を聞いた。

自分の頭蓋が割れる、

あのくぐもった破裂音を最後に……

さあ、あなたも……

「潰
れ
た
い
？
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4312a/>

潰れたい

2010年10月10日01時17分発行